

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | 晋西北抗日根拠地における労働英雄運動：陝甘寧辺区との比較を中心に |
| Author(s) | 李, 芸 |
| Citation | 史学研究, 310 : 1 - 20 |
| Issue Date | 2021-10-15 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055714 |
| Right | |
| Relation | |



晋西北抗日根拠地における労働英雄運動

— 陝甘寧辺区との比較を中心に —

李

芸

はじめに

中国共産党（以下、中共）の晋西北根拠地は山西省の西北部に位置し、黄河以東、汾陽以北、同蒲線以西、長城以南の三五県の地域である。一九四〇年において全地区三五県の人口は約三五〇万人であるが、興県、保徳、臨県など中共の支配下にある地域の人口は一〇〇万人余りである。一九四〇年

一月一五日に中共政權が成立し、「山西省政府第二遊撃区行政公署」と称したが、後に「晋西北行政公署」に改められ、一九四三年には「晋綏辺区行政公署」に変更された。⁽²⁾中共政權の行政区画は晋綏辺区と称するが、実際には綏遠地区に対する中共の支配力が弱く、晋西北での活動が中心となっていたため、本文の検討地域も晋西北に限定する。

中共はソ連のスタハノフ運動に倣って一九三九年に労働英

雄の制度を設け、「人民生産奨励条例」によって毎年功勞の顕著な者を表彰してきた。中共は、このような労働英雄運動を生産運動の中心として一九四三年一月から本格的に発動させている。⁽³⁾他の根拠地も生産發展のため、一九四〇年代から労働英雄運動を始めている。

労働英雄運動に関する研究は既に多く存在する。王彩霞は陝甘寧辺区の労働英雄運動を全面的に考察し、その發展と選抜のメカニズムを紹介する。⁽⁴⁾『解放日報』をはじめとするマスコミを中心に、労働英雄運動の宣伝方法とその効果をまとめた上で、労働英雄運動の影響を分析し、その問題点と政府の対応にも言及している。⁽⁵⁾王建华は英雄の選抜と育成のプロセスを考察し、政治儀礼の演出を通じて、中共が目指す理想的な人格が提示されたと指摘する。⁽⁶⁾韓曉莉は社会改造と社会動員の面から労働英雄運動の役割を分析する。労働英雄運動

は生産動員のため起こされた運動である。運動を通じて労働英雄という集団が作られ、英雄たちは生産に参加しただけでなく、根拠地社会の改造にも参入して新たな農村リーダーになったと指摘する。農民出身の英雄たちは容易に民衆の支持を得、政策を順調に実施する保障となった。王智は晋西北根拠地の労働英雄運動の背景、展開と労働英雄自体を紹介し、代表的な温象栓、張初元、張秋林などの履歴を分析している。また、労働英雄運動の意義と現代の社会に対する啓発的な意味について指摘する。張基輝は中共指導の下で炭坑労働者から基層幹部、晋綏辺区特等労働英雄に成長した張初元の履歴の検討を通じて、中共の農村改造の経験と効果を分析する。賈莉は晋綏根拠地における労働英雄運動の展開と代表的な労働英雄を紹介し、政治、経済動員と社会変革における役割についても分析する。佐藤宏は抗日民族統一戦線期中共の経済政策の基本路線の表現、経済建設への大衆動員政策、農村基礎幹部養成の三つの視角から労働英雄運動を分析し、特に基層幹部の養成と労働英雄の関係を論じる。内田知行の研究も労働英雄に言及している。彼は陝甘寧辺区において、富農経済政策が農業生産互助運動を促したことを指摘する。ここで言う「富農」とは共產党政権の下で豊かになった富農であり、中共は彼らを「新型富農」と呼んでいた。内田はこのような富農経済政策を「新富農路線」と定義し、その定着を論じる際に、陝甘寧辺区における労働英雄運動も新富農路線であったと主張する。

以上の先行研究から見ると、労働英雄運動の展開、英雄の社会改造における役割を中心とした研究が多いが、各根拠地における労働英雄運動を比較した研究はほとんどない。小論では、比較を通じて労働英雄運動の全体像をさらに明確にしたい。中共の革命根拠地に関する研究は、各根拠地の特徴に応じた多様な革命の状況を究明してきたが、高橋伸夫が指摘するように、そのような地域の多様性が明らかになるほど、中共による革命の全体像を単一の物語として描くことが困難になっていった。中共の政権は多様な地域を一つの権力によってまとめる形で成立しており、その実態を理解するためには、多様な地域の相互作用に注目する必要があると考える。小論では主に日中戦争時期の晋西北根拠地と陝甘寧辺区の労働英雄運動の比較を通じて、このような各地域の相互作用についても考えてみたい。

一、労働英雄運動の展開

(1) 陝甘寧辺区の労働英雄運動

(a) 萌芽時期

生産動員のため、陝甘寧辺区では他の根拠地に先駆けて、一九三八年から一九四〇年の間に様々な条例を出し、展覧会を主要な形式として功勞の顕著な者を奨励する活動が始まった。一九三八年一月一日から三日まで延安工人製造品競賽展覧会が開かれ、先進工場と二〇〇名ほどの個人英雄が表彰さ

れている。一九三八年の春耕期には農民労働英雄が創出された。一九三九年一月一日には、辺区農産競賽展覽会（第一回農展会）が延安南関で開かれた。展覽会は辺区概況、農作物、果物、牧畜、薬種、狩猟と林業の六つの展覽室に分かれ、二千件の展示物が展示された。展覽会は半月続き、二千余人の農民が受賞し、四等以上の英雄は一五〇〇人以上であった。同年二月に延安で生産動員大会が開かれ、毛沢東が生産の発展を呼びかけた。その呼びかけに応え、辺区政府は四月に「人民生産奨励条例」、「督導民衆生産運動奨励条例」、「機關、部隊、学校人員生産運動奨励条例」を發表し、功労の顕著な団体と個人を表彰した。五月に辺区第一回工業展覽会が魯迅芸術学院大礼堂で開催され、千種類ほどの工業品が展示され、団体と五〇人余りの英雄が受賞した。一九四〇年一月一六日には、辺区第二回農工展覽会が延安新市場で一八日間開かれ、三千人ほどの労働英雄が受賞した。二月一八日には延安各機關が生産大会を開き、労働英雄甲等一〇四人、乙等二五二人、丙等二六〇人を表彰している。

一九三九年には一八一一名の労働英雄が創出されているが、当時の文献では、これらは全辺区人口の約三・三パーセントを占めるとされる。その割合で計算すると、「辺区」人口は五万四八七九人となるが、一九四一年の辺区人口は一三四万二一六六人である。一方、一九四一年延安市の人口は五〇九二人、延安县は二万八三〇一人、富県は三万一七八一人、甘泉県は一万一五一一人、固林県は一万

七三〇三人であるから、数字から見れば、一九三九年労働英雄の表彰はおそらく延安周辺に限られたものと考えられる。

以上のことから見ると、一九三八年から四〇年代初めまで労働英雄の表彰は生産成績という単一の基準によるものであり、その後に見られるような道徳的な要素を入れていないと考えられる。そして、この時期の労働英雄表彰は表彰に止まり、英雄の模範的な役割に注目していないため、大衆運動になっていないと考えられる。

(b) 代表的な英雄の創設

一九四〇年代になると、国民政府は辺区への援助を中止し、辺区の経済状況がさらに厳しくなった。経済困難を乗り越えるため、辺区政府は大生産運動と精兵簡政を提起した。その政策により、辺区政府はスタハノフのような典型的な積極分子を探し始め、労働英雄運動は第二段階に入った。まずは農民労働英雄を創出する。その典型は呉満有である。呉満有は延安県柳林区二郷の呉家棗園出身で、「模範公民」として英雄に選ばれ、大いに宣伝された。一九四二年四月三〇日、『解放日報』に初めて呉満有の報道が現れ、「辺区農民向呉満有看齐」という社論も同時に發表された。趙占魁は工人労働英雄に選ばれ、一九四二年九月七日に『解放日報』に「人人都在談説着趙占魁」、九月一日に「向模範工人趙占魁學習」の社論が掲載された。

この段階においては、農民英雄呉満有、工人英雄趙占魁の

二人の典型が創設され、そして、彼らの生産成績だけでなく、「道徳模範」という面が重視されている。呉満有は公糧を多く納め、家族が入隊しており、村人の経済発展を熱心に助ける模範公民であると評価されている。一方、趙占魁は一貫性があり、前向きで責任感があり、正直で勤勉、一生懸命で自己犠牲的な人と評価されている。

(c) 労働英雄運動の高潮

一九四二年一〇月、辺区总工会は趙占魁に学ぶ運動をすべの工場で開催しようと呼びかけた。その呼びかけに応え、振華製紙工場が生産競争を一〇月一九日から二一日まで展開した。新華工場の工場長は工場成立三周年の記念会において趙占魁運動の成果をまとめた。以上の内容から見ると、一九四二年の後半から趙占魁運動が広く展開されていた。農業では、呉満有運動が一九四三年春耕の前から展開され、個人対個人、村対村の生産競争も始まった。

労働英雄大会の開催は労働英雄運動の最高潮である。一九四三年一月二六日から二月一六日まで延安で第一回辺区労働英雄大会が開かれ、一八五人の英雄が表彰された。大会において、生産建設の経験をもとめ、毛沢東が「組織起來」という報告を行っている。それ以降、労働英雄運動はもう一步を進め、英雄の選抜も基層から行われるようになる。一九四四年二月二一日から一九四五年一月一四日まで第二回辺区労働英雄と模範工作者大会が開催され、四六三人の英

雄と模範が選ばれた。毛沢東の報告「両三年内完全学会経済工作」においては、労働英雄と模範工作者の指導者の、骨幹的、橋渡しの役割が指摘されている。

(2) 晋西北根拠地の労働英雄運動

(a) 背景

日中戦争が勃発した後、日本軍は根拠地に対して数回の掃蕩を行い、特に一九四〇年に春、夏、冬の三つの大規模な掃蕩を実施し、殲滅作戦が行われた。一九四一年にさらに一七回の部分的な掃蕩が行われた。統計によると、一九四二年までに根拠地は一九四〇年前半と比べて三分の一に縮小し、人口は三三〇万人から一〇〇万人に、耕地面積は戦前の八四パーセントに、労働力は三分の一に、穀物生産は三分の一に、それぞれ減少したとされる。一九四一年三月四日から二日まで、晋西北行署は金融経済会議を開催した。日本軍の掃蕩、経済封鎖が根拠地に大きな困難をもたらしたことについて、会議は困難を乗り越えるため、農業を中心に生産事業を広く展開していくことを決定した。その後、各地で春耕運動が展開され、部隊も積極的に開墾と生産に参加するようになった。

(b) 四回の労働英雄大会

一九四一年の春耕時期、山西省各根拠地政府は労働競争を展開し、労働英雄を創出しようと呼びかけた。同年四月、晋

西北行署と抗日救国聯合会は「二百人の労働英雄を創出するために頑張ろう」というスローガンを提起し、婦女抗日救国聯合会も四〇人の女性労働英雄を生み出すことを宣言した。⁽²⁰⁾

晋西北根拠地は山西省の各根拠地の中で一番早く労働英雄大会を開催した地域である。一九四二年一月一三日から一日まで、晋西北労働英雄検閲及び生産建設展覽会が興県で開かれ、一〇〇人余りの英雄が選ばれた。大会に出席する英雄らの襟には労働英雄荣誉证书がつけられ、興県の各商店も提灯をつるし、色絹を飾りつけて英雄を歓迎した。行署主任の統范亭と行署副主任の牛蔭冠は労働英雄を高く評価した。⁽²¹⁾

一九四二年二月、辺区は第二回労働英雄大会の準備に着手する。二月初め、各県は辺区大会へ出席する英雄を選抜して欲送した。興県は二月一日に英雄欲送大会を開き、英雄らが街を一周した。二月二日に辺区第二回労働英雄検閲大会が開催され、一〇県五人の英雄が出席した。興県の商店はセールを実施し、民衆は新しい服を着て大会に集い、町中は非常に賑やかであったという。⁽²²⁾ また、第一回大会賞品の予算が一万三、四〇元であったのに対して、第二回大会においては行署が五万元を支給して賞品を購入しており、奨励品はより手厚かったと思われる。⁽²³⁾ 大会の閉幕後、『抗戦日報』にコラムが設けられ、特等労働英雄王思良、張秋鳳、宋侯女について紹介された。第二回までの労働英雄大会に出席した英雄は興県、臨県、保徳の代表が多数を占め、春耕、村選挙、秋収、減租減息運動と結合して選ばれていた。しかし、他の

県においては、英雄が政府から指名されて連れてこられたこともある。⁽²⁴⁾

一九四三年三月に行署は同年の労働英雄の条件を発表し、一月に第三回の労働英雄大会を開くことを決定した。その規定によると、春耕時期に労働英雄の条件と奨励方法を広く宣伝し、各自然村で生産競争を展開することとなっていた。⁽²⁵⁾

春耕以来、労働競争は広範に開始され、労働英雄王思良、温象栓などが挑戦を受ける対象となった。生産競争を通じ、多くの労働英雄が生まれ、「労働英雄をはじめとする模範村を作ろう」というスローガンが提起され、労働英雄運動はさらに新たな進展を見せた。第三回労働英雄大会は一九四四年一月七日から一五日まで開催され、約二、三〇人の英雄が出席し、毛沢東の呼びかけ——「組織起来」をめぐり議論を展開した。⁽²⁶⁾ 張初元が特等労働英雄に選ばれ、彼の「労武結合」は高く評価された。「労武結合」とは変工組という農業の互助組織と民兵組織を合体させ、民兵が戦闘で耕作する時間がない場合に皆が民兵の土地を耕作するという体制である。民兵は暇な時に農作業に参加する。前二回の大会と比べると、第三回大会の期間と規模が大きく、宣伝にも力が注がれている。⁽²⁷⁾

一九四四年一月初め、群英大会と改称された第四回大会の準備が始まった。群英大会は二月七日から三十一日まで開催され、七五一人の英雄が出席し、規模がより大きい。大会において、一九四五年度の任務—抗戦、生産建設、軍事訓練が明確にされ、「労武結合」がさらに強調された。⁽²⁸⁾

以上のことから見ると、陝甘寧辺区は他の根拠地に先駆けで労働英雄の表彰を始めるが、実質的な全辺区規模での開催を目指し、「辺区労働英雄大会」の名前を冠して労働英雄大会を開催するのは晋西北根拠地が先である。また、一九四二年になると、英雄の選抜は春耕、村選挙、秋収、減租減息運動などの大衆動員と結合して行われている。先行研究は、延安を中心とした生産運動に他の根拠地が呼応することを前提として議論を進めているが、晋西北の事例からわかるように、生産運動や労働英雄運動に関する様々な取り組みのすべては延安から始まるわけではないと考えられる。

二、英雄の選抜

(一) 陝甘寧辺区

労働英雄運動の展開は中共にとって初めてのことであり、一九四二年の段階においても英雄の選定方法や範囲などは、手探りの段階であった。そのため、幹部はこの段階においても、奨励が生産を刺激するためのものであると考え、生産量を基準にして英雄が探し出された。民衆も英雄に選ばれる意味を理解するどころか、誤解まで引き起こしていた。例えば、一九四三年春に政府が労働英雄張振財に牛一頭を賞品として与えたが、民衆が「張振財はお気の毒で、政府が牛を賞品として与えたのは彼から牛二頭をもらうためだ」という議論があった^④。その時期において、英雄は上から選ばれ、割り当て

られたこともある。呉満有も上から選ばれた英雄の一人である。

模範的な、みんなに認められる農村労働英雄を探すのは簡単なことではない。(中略) ついに見つかった。延安県各区の区長会議において、柳林区の区長は呉満有を紹介してくれた。彼によると、呉満有は農作業に頑張つて、公糧も積極的に納めて、出征兵士の家族でもあり、模範的な農村労働英雄といえる。それで延安県政府から三〇キロメートル離れた柳林区第二郷呉家棗園に行つて呉満有を訪ねた。^⑤

一九四三年一〇月一四日の『解放日報』において、労働英雄の選抜条件と方法が発表された。規定では、労働英雄は選挙によって選ばれることになっていた。^⑥しかし、実は分配される数によって英雄を探すことが多く、指名して連れてこられたこともある。^⑦一九四三年一月二六日からの辺区第一回労働英雄大会以降、労働英雄運動が新たな段階に入り、民衆は既に労働英雄の榮譽を感じ取るようになり、労働英雄も第二回大会以降、選挙により選ばれるようになった。^⑧以前英雄に選ばれるのを嫌った人は、一九四四年になってから出馬するようになった。王建華の研究によれば、新正県において、父親が息子のために票集めをしたり、民衆が候補者を批判したり、偽の英雄を摘発したりすることが見られ、選挙を通じ

て、辺区第一回労働英雄大会に出席した英雄の四一・四パーセントが落選した。その内、安塞県は四八パーセント、固林は七九パーセントの英雄が不合格であった。⁽⁴⁶⁾

(2) 晋西北根拠地

晋西北根拠地においては、一九四一年七月に既に労働英雄の選抜方法が定められ、一九四二年一月一三日には第一回の労働英雄大会が開催され、農民特等労働英雄第一位の楊奴作、第二位の劉有多、第三位の王建榮が表彰された。

(a) 第一回労働英雄大会の選抜方法

第一回労働英雄大会の労働英雄の選抜方法は以下のようなものである。

まず各編村の村民大会によって村の労働英雄を選び、行政村全体の労働英雄大会で五人から一五人の模範を選ぶ。(中略) 区の労働英雄一〇人から二〇人は各村の模範英雄、評議委員、民衆代表から作られる大会により選ばれる。(中略) 各県の労働英雄が決められてから、一月末に興県で全晋西労働英雄大会を開き、民主選挙で晋西模範労働英雄二〇〇名を選抜する。⁽⁴⁷⁾

興県の世帯数と人口数は一九四一年において九万三八三三三(世帯数は不明)、一九四五年七月において二万二八九七戸、

九万四一九〇人であり、⁽⁴⁸⁾ 後者の統計で各戸平均約四・三人であった。一九四〇年九月一日、晋西北行署は第二次行政会議を開き、閻錫山時期の閻隣制を廃止し、区—行政村—自然村の行政レベルへ変更することを決め、興県を六区六一行政村に分けているから、⁽⁴⁹⁾ 一九四一年の人口を基に計算すれば、各行政村の人口は平均一五三八人、各区の人口は平均一万五六三八人となる。各行政村では二四戸、一〇三人から七二戸、三〇八人に対し一人の割合、各区では一八二戸、七八二人から三六四戸、一五六四人に対し一人の割合で、労働英雄が選ばれたことになる。

(b) 第三回労働英雄大会の選抜方法

第三回労働英雄大会の労働英雄の選抜方法は以下のようなものである。

行政公署が一九四三年労働英雄の条件を発表し、一月月に第三回の晋西北労働英雄大会を開催すると定めた。(中略) 行政村から三、五人の労働英雄を選んで区に送り、区はまた五、六人を選んで県に送り、県の模範労働英雄大会に参加して生産の経験を交流する。各県の晋西北労働英雄大会に参加する人数の割合は遊撃区において一万分の一、根拠地において一万分の二である。労働英雄大会の影響を拡大するために、各県長は少なくとも一人の労働英雄(大会で選ばれたもの)と頻繁に連絡を取り、

助けを与える。⁽⁵⁰⁾

晋西北根拠地においては、一九四一年から既に基層から労働英雄を選ぶようになっていたが、陝甘寧辺区では一九四四年になってからようやく基層から選挙によって労働英雄の選抜を行うようになっていた。⁽⁵¹⁾ 行政村レベルから全辺区レベルまでの英雄の序列化も晋西北根拠地が先行していることがわかる。

三、各辺区における特等労働英雄の特徴

(1) 陝甘寧辺区

呉満有は、一九四三年末の陝甘寧辺区労働英雄大会において特等労働英雄に選ばれた。呉満有は一九二八年に飢饉を逃れるために、延安の呉家棗園に移住し、一九三四年の土地革命によって約七〇垧（一垧は陝甘寧、晋西北地区では三畝）の山地を分配された。一九四二年になると、七七垧の山地を耕作し、四二石の糧食を収穫した。同時に牛五頭、驢二頭、羊二百頭、馬二頭を所有し、長工二人、羊飼いの子供一人、牛飼いの子供半分の労働力を雇っており、富農と言える。⁽⁵²⁾ 呉満有以外に、一九四三年特等労働英雄に選ばれた農民には申長林、陳徳発、石明德、劉玉厚がいる。その他、楊朝臣、孫滿福らが甲等労働英雄に選抜された。その中で、呉満有、申長林、陳徳発、楊朝臣が延属分区、石明德が関中分区、劉玉厚

が綏徳分区、孫万福が隴東分区に属する。⁽⁵³⁾ 表一から見ると、労働英雄らは黨員或いは党の基層幹部を務めていた。また、表一に示されたような、耕地面積、年収穫高、所有役畜頭数および労働力雇用の状況からみて、石明德が貧農である以外は、富農もしくは富裕中農であったことは間違いないであろう。

中国革命の性格と方向性を論じた日中戦争中の毛沢東の代表的な著作と中共の土地政策に関する指示において、中共は富農経済の存在を認めていた。しかし、富農の具体的な基準については言及されていなかった。⁽⁵⁴⁾ 一方、一九三三年に発表された二つの文件〔怎樣分析階級〕「關於土地闘争中一些問題的決定」によると、地主—富農—中農—貧農—工人と五つの階級に分けられ、土地と生産用具などの所有の程度、搾取の有無—他人の労働に依存するのか、それとも自己の労働により生活しているのか—によって階級を区分し、搾取収入が年間総収入の一五パーセント以上（特定の事情があれば三〇パーセント）を占める場合には富農であると規定していた。搾取方式は主に雇用労働、土地の小作貸付、金貸し、商業を含む。⁽⁵⁵⁾ 毛沢東によって作成された二つの文件は一九三四年に入ると留ソ派に批判されたが、毛の指導権の強化とともにある程度復活し、一九四〇年代後半になってから中共の農民政策に全面的に採用された。⁽⁵⁶⁾

また、現実の階級区分においては、一九三三年の文件のように搾取率を詳細に計算して階級区分を確定することは困難

表 1：陝甘寧辺区第一回労働英雄大会の代表的な英雄

| 名前 | 在住地 | 政治身分 | 土地と家畜 |
|---------------|-----------------|-------------------|---|
| ①申長林 8人家族 | 延属分区延安县 馬家溝村 | 党員 | 1935年に40垧の土地を分配され、1943年に318畝の土地、牛4頭、驢1頭、羊120頭を所有し、長工半分の労働力、羊飼ひ1人を雇う。 |
| ②陳德堯 | 延属分区延安县 馬家溝村 | 郷政府委員、 中共党支部幹部 | 土地革命によって50垧の土地を獲得し、1943年に31垧の土地を所有する。1944年の生産計画において、1人を雇う予定であると言及する。 |
| ③楊朝臣 一人暮らし | 延属分区安塞県 小樵湾村 | 党員 | 1943年に22垧の土地を所有し、また8垧の土地を夥種により耕作し、長工1人を雇う。1941年から43年にかけて33石の糧食を収穫する。 |
| ④石明德 | 閩中分区淳耀県 白塬村 | 村主任 | 1943年50畝の土地を小作する。 |
| ⑤劉玉厚 11人家族 | 綏德分区綏德県 塬家橋村 | 党員、村主任、 減租会委員 | 1943年に61垧の土地を所有し、記事において衣食が満ち足りた中農と評価される。弟2人、従弟、妹の夫と5人の変工隊を組織する以外に、長工1人を雇う予定である。 |
| ⑥孫万福 6人家族 | 隴東分区曲子県 呉旗村 | 郷参議員 | 1943年に160畝の土地、家畜4頭を所有する。長工1人を雇う。 |

①「模範党員と労働英雄申長林同志」『解放日報』1944年1月28日、第2版。②「馬家溝和陳德堯」『解放日報』1944年1月2日、第2版；「「状元」陳德堯回来以後」『解放日報』1944年2月17日、第4版。③「楊朝臣今年計画開荒五垧鋤草四畝」『解放日報』1943年2月28日、第4版；「楊朝臣是退伍軍人的旗幟」『解放日報』1944年1月8日、第4版。④「模範的白塬村」『解放日報』1943年12月8日、第1版。⑤「劉玉厚夏田全部下種」『解放日報』1943年4月29日、第2版；「劉玉厚与郝家溝」『解放日報』1944年2月21日、第4版。⑥趙元明編『陝甘寧辺区の労働英雄』大衆書店、1946年、36-37頁。

であったと推察される。内戦期の土地改革に関する多くの研究においても、搾取率の適用や計算が困難であったことが指摘されている。田原史起の研究によれば、搾取率の基準が機能しなかった原因は、階級区分に参加した農民や村幹部が搾取率を理解せず、わかりやすい土地や農具の所有程度の基準を受け入れたからである^⑧。方慧容は搾取率の計算が必要とした農民の労働日数の情報が農民の記憶により明らかにしにくかったと指摘した^⑨。中井明も農民の労働時間を明らかにするのが難しく、工作組が労働時間の調査と搾取率の算出に固執すれば工作の停滞を招くと指摘した。このため、土地調査に有利なように土地の量のみを基準とする傾向を強めたものと推察している^⑩。

以上のことから、日中戦争期においても、搾取率を厳密に計算できず、土地、役畜の所有の程度、収穫高などで階級区分を行っていた可能性があると考えられる。

(2) 晋西北根拠地

晋西北根拠地においては、一九四二年から一九四五年まで四回の労働英雄大会が開かれ、四人の農民特等労働英雄が選ばれた(表二)。

第一回労働英雄大会において、楊奴作が農民特等労働英雄に選ばれている。楊奴作は保德県出身で、当時三九歳である。彼は小さい頃から内モンゴルに行き、戦争が始まってから地元で働くようになっていた。妻と娘二人、息子一人の

表2：晋西北根拠地四回労働英雄大会の代表的な英雄

| | 労働力 | 所有土地数と生産量 |
|-------------|------------------------|---|
| 楊奴作 5人家族 | 本人1人 | 1941年に36畝の土地を開墾し、果樹10本、粟5本を植える。粟6石、豆0.3石、カボチャ1,000キロ、ジャガイモ450キロを収穫する。農作業以外に、石炭の販売もする。 |
| 王思良 8人家族 | 本人1人 | 30畝の土地を所有し、また30畝の土地を小作する。また果樹92本を植え、紡織もする。他の人の収穫量の1.25倍を収穫する。 |
| 張初元 | | 15垧の土地を耕作する一方で炭坑で働き、他の人の収穫量の倍に当たる7石の食糧を収穫する。 |
| 温象栓 8人家族 | 本人、息子2人と短工1人、変工組も組織する。 | 1942年に90垧の荒地を購入する。収穫量は不明であるが、1942年に10石の公糧を納める。 |

五人家族であるが、労働力は彼一人だけで、家畜もない。一九四一年に、辺区政府が生産と開墾を呼びかけ、楊奴作は合計三六畝を開墾し、果樹一〇本、粟五本を植えている。記事において、彼は貧農とされている。一九四一年の晋西北の土地所有状況によると、地主一人当たりの平均土地面積は八八・二畝、富農は三三・三八畝、中農は二三・八畝、貧農は九・五八畝である。晋西北は土地が痩せているため、華北の平均水準（中農で四〜五畝）をはるかに上回る土地を必要とすることが理解できる。楊の家庭において、一人当たりの土地面積は七・二畝であり、この基準に照らし

ても貧農と判断できる。彼が労働英雄に選ばれたのは、開墾と植樹に励んだ他、痩せた土地でも生産が可能なカボチャ、ジャガイモを大量に植えて顕著な成績を上げたからだと考えられる。

王思良は第二回労働英雄大会において、農民特等労働英雄に選ばれている。彼も保德県出身で、八人家族である。労働力は彼一人で、羊三頭、子羊五頭を飼っている。一九四二年に五垧の土地を所有し、一〇垧の土地を小作し、一一垧の土地を開墾し、段々畑三畝を整えた。生活が苦しかったため、七垧の土地を売った。また果樹九二本を植え、労働互助小組を組織し、紡織もする。村農会秘書を二年間、区農会の宣伝職を一年間勤めている。王の家庭が所有している土地は七垧の売却前は一六垧で、一人当たり二垧となり、華北の平均水準では小作地の必要のないやや豊かな中農に相当するが、土地が痩せているため、更に一〇垧の土地を小作する必要があるとみられる。このような状況から王は貧農であると判断できる。彼は、開墾、植樹、基層幹部としての生産の組織化という業績によって、労働英雄として認められたものと考えられる。

晋西北根拠地において一番有名な英雄は、張初元である。彼は第三回と第四回の労働英雄大会において特等労働英雄に選ばれ、『抗戦日報』において大いに宣伝された。張初元は一九一三年に寧武県旧堡村で一番貧しい家の三男として生まれ、小さい頃から放牧に従事し、後に採炭工として生計を立

てている。一九四〇年春に寧武県中共工会幹部部に発見され、旧堡村煤鉱工会主任になる。それ以降、自衛隊隊長、除奸主任などをへて一九四一年七月に黨員になり、日本軍の掃蕩に對して積極的に民兵を組織し八路軍と協力する。民兵活動だけでなく、村において、互助運動、元閭長「周大頭」(周金奎)に對する反汚職闘争、減租運動を指導した。一九四三年一月二日に寧武県労働模範、一九四四年一月七日の第三回群英大会において特等労働英雄に選ばれた。⁽⁶⁴⁾一九四三年に彼は一五垧の土地を耕作する一方で炭坑で働き、他の人の収穫量の倍に当たる七石の食糧を収穫した。⁽⁶⁵⁾資料によると、一九四二年において張初元はまだ貧農とみられている。⁽⁶⁶⁾張初元の履歴から見ると、彼は「農民」というより基層幹部として活動していた。

晋綏根拠地の機関紙『抗戦日報』において大いに宣伝された英雄には張初元以外に、温象栓がいる。温象栓は第三回群英大会において特等労働英雄の第二位に選ばれた。彼は興県温家寨出身の八人家族で、元々小作農であった。減租政策によつて一九四二年に九〇垧の荒地を購入し、一九四三年四月から一〇月まで労働力一人を雇っているが、家族労働力は合計で三人であるから、一般的な搾取率から推察すれば富裕中農と考えられる。彼は農業生産に尽力しただけでなく、模範的な農民抗日救国聯合会の會員、出征兵士の家族であった。⁽⁶⁷⁾

以上のことから、温象栓を除き、楊奴作、王思良、張初元

はすべて貧農、あるいは農民というよりも基層幹部として活躍していた人物と考えてよい。

(3) 他の根拠地

各根拠地における労働英雄運動の関連性について考えるため、晋西北根拠地以外の華北の各根拠地の労働英雄の状況について確認する。晋冀魯豫辺区の太行根拠地において、李順達は高く評価された英雄の一人である。彼は一九三九年に西溝村の自衛隊隊長を務め、一九四〇年に中共に入党した。

一九四二年に西溝村が晋冀魯豫辺区政府に「労武結合模範村」として表彰され、李順達も平順県政府に「労武結合英雄」として表彰されている。⁽⁶⁸⁾また彼は、一九四四年一月二〇日の太行区第一回殺敵英雄・労働英雄大会において「生産互助一等英雄」に選ばれ、「辺区農民の方向」と称されている。

一九四六年二月二日の第二回群英大会においては「合作労働一等英雄」に選ばれ、「翻身(階級的抑圧からの解放)農民の道」と評価された。⁽⁶⁹⁾彼は一九四六年に既に土地五〇畝、驢一頭、牛二頭、羊四〇頭を所有しており、労働力の雇用状況は不明であるが、経営規模から見ても富農と認識されたものと考えられる。⁽⁷⁰⁾以上のことから見ると、「労武結合」という用語は、太行根拠地において一九四二年に既に使われていた。しかし、張初元の「労武結合」と異なり、李順達は民兵として活動するとともに、彼自身が本来農民として農業に重点を置く生活をしており、その状況から「労武結合英雄」と

評価されている。

晋冀魯豫邊区の太岳根拠地においては、石振明が英雄に選抜されている。彼は一九四四年に浮山県と太岳区労働英雄に選ばれ、六月に入党する。そして彼は一二〇畝の土地、牛六頭、驢一頭、羊数十頭を所有し、三人を雇っており、富農と考えられる。

晋察冀根拠地においては胡順義が有名な英雄である。一九四四年に食糧二一六石、ジャガイモと野菜それぞれ三千キロを収穫し、羊三〇頭、牛五頭、驢二頭、鶏二〇匹を飼っている。彼は一九四四年一月に辺区第二回群英大会に出席した。

以上から見ると、晋西北の労働英雄は貧農が多く、呉満有のような「新型富農」ではない。内田知行は土地革命の徹底度を基準に、陝甘寧邊区の農村は先進農村と後進農村に分けられると指摘する。先進農村（延属分区、関中分区、隴東分区）はいわゆる土地革命を徹底的に行い、「新型富農」の形成が最も顕著な地域である。その一方、後進農村（綏德分区、三边分区）とは土地革命の徹底度が低く、「新型富農」の形成も遅れた地域である。岳謙厚によれば、晋西北の減租減息運動は、一九四〇年二月—一九四二年末、一九四三年初め—一九四四年八月、一九四四年八月—一九四五年八月の三段階に分けられる。晋西北の農村は一九四〇年代の初めには後進農村に当たり、「新型富農」が存在せず、第一、二回の労働英雄はおおよそ貧農である。減租減息を通じて九〇畝の山地を

購入して豊かになり、半年間労働力一人を雇うようになった温象栓は一九四三年末に陝甘寧邊区と同様の富農経済政策によって選ばれた英雄で、明らかに延安の影響を受けたものと思われる。一方、前線地域の晋西北において、「労武結合」—張初元を農民特等英雄の一位に選んで大いに宣伝するのは自らの特徴である。山西省の他の根拠地の労働英雄大会は一九四四年から開催されるようになっており、延安の影響を受けたものとみられる。

四、労働英雄運動の主題

(1) 陝甘寧邊区

陝甘寧邊区において、労働英雄は政府の政策に協力する模範としても顕彰されているものの、その顕彰は主には生産動員のためのものであり、生産の向上が最も重要な任務であった。高崗は一九四三年の辺区労働英雄大会において、「労働英雄たちは戻ってから来年の生産計画をたててほしい」、「来年の生産量が倍増するように頑張ろう」と述べた。陝甘寧邊区政府主席の林伯渠も生産の重要性を強調し、労働英雄大会の閉幕式において、以下のように述べている。

労働英雄大会では様々な問題を論じたが、皆さんは最も重要なものをつっかり覚えておき、戻ったら実行していただく。第一、二年間耕作して一年分の食糧を余らせ早

越に備える。第二、生産事業を普及させる。全辺区で多くの労働英雄を作りあげ、労働英雄が生産の指導者になることを希望する。第三、軍民合作で辺区を守る。民衆が軍隊に協力して自衛力を強める。第四、毛主席の「組織しよう」、高崗同志の「自慢しないでもっと頑張ろう」の呼びかけに応え、労働英雄が民衆の中心になって模範郷村、模範工場、模範連隊を作り、全部の労働力を組織して生産に参加すること、である。⁽⁷⁶⁾

(2) 晋西北根拠地

陝甘寧辺区と比べて、前線の晋西北では当初から労働英雄の選抜において、地元の防衛組織の育成と結合した形での生産動員が重視されていた。一九四一年の五三〇惨案記念日において、離石X区では労働英雄二二名を表彰した。甲等労働英雄五人の内、四人は自衛隊の仕事を担うとともに、農作業にも尽力していた。⁽⁷⁷⁾当時、「労武結合」というスローガンは使用されていないが、晋西北の労働英雄運動は、事実上「労武結合」の重要な主題として展開していたといつてよい。その後、太行区の李順達の実践が「労武結合」として伝えられ、一九四四年の第三、四回大会において、張初元は二回続けて「労武結合」の農民特等労働英雄に選ばれている。その理由は以下の通りである。

張初元は民兵を率いて闘い、変工隊を組織して民兵と出

征兵士の家族の生産を助け、民衆を指導して反汚職と減租運動を行った。従って一等労働英雄に選ばれたのである。⁽⁷⁸⁾

そして、張初元は晋西北の呉満有であり、「労武結合」が晋西北の方向であると評価されている。

生産運動の方向は(中略)陝甘寧辺区の労働英雄呉満有に学ぶことである。呉満有の方向は変工隊を組織して集団で労働するということである。(中略)晋綏辺区においても、呉満有のような労働英雄を作り出した。それは「労武結合」の模範—張初元である。⁽⁷⁹⁾

以上のことから見ると、呉満有が高く評価されたのは毛沢東の「組織起来」に応え、変工隊を組織して集団で労働するからである。張初元が呉満有のような英雄と評価された理由は変工組の組織と民兵組織を合体させて戦闘と生産が両立できるようになったからである。晋西北は後方の陝甘寧辺区と同じく生産の向上と合作経済を重視したが、陝甘寧辺区の合作経済が富農経営と結合したものであるのに対して、晋西北の合作経済は「労武結合」の組織であり、内容には違いがあると考えられる。

五、晋西北根拠地の労働英雄大会における民俗利用

中共が革命において、よく民俗を利用して自分の政策を宣伝したり民衆を動員したりすることは既に多くの研究者によって指摘されている。丸田孝志は中共根拠地における農曆の時間、シンボル、民俗の利用を対象として中共の政治動員を分析している。中華民国が成立してから、新曆の使用が推し進められていたが、農曆に頼って生活している民衆になかなか受け入れられなかった。農曆活動を利用して宣伝と動員を行うのは中共にとって不可欠なことである。陝甘寧辺区において「封建的な」要素（例えば、迷信）を取り除いて農曆活動を全面的に展開したのは一九四二年の整風運動以降であり、労働英雄運動については一九四三年以降に顕著な民俗利用が確認されている。⁽⁸⁾しかし、晋西北根拠地は陝甘寧辺区に先駆けて全辺区規模を目指して労働英雄大会を開催している他、労働英雄運動における民俗利用も先行していると見られる。

(1) 英雄を「状元」とする呼称の使用（一九四二年）

状元は中国の科挙制度において最終試験（唐朝では省試、宋朝では殿試）で第一等の成績を修めた者に与えられる称号である。中共根拠地では労働英雄を状元と称しており、民衆の心理をうまく利用したと考えられる。⁽⁹⁾ 陝甘寧辺区において

は一九四四年二月に英雄を状元と呼ぶ記事が初出するか、晋西北では一九四二年二月の第二回労働英雄大会からこのような呼称が確認できる。『抗戦日報』の報道によれば、「労働英雄大会は午前一〇時から始まり、三千人余りが出席した。大会の主席張処長は挨拶をして大会の意義を説明した。（中略）労働英雄は工人の状元、農民の状元、皆労働英雄を字ばなければならぬ」と述べた⁽¹⁰⁾という。

(2) 廟会の雰囲気の演出（一九四二年）

労働英雄大会においては、民衆の関心を引き起こすため、廟会の雰囲気を演出した。陝甘寧辺区の労働英雄大会は、一九四三年から各地の集市・廟会を利用しながら開催されるようになるので、このような民俗利用も晋西北が先行している。晋西北ではやはり第二回労働英雄大会から廟会の雰囲気の演出が行われている。『抗戦日報』は以下のような街の雰囲気を伝えている。

大会に参加した英雄らの服には赤い労働英雄榮譽証をつけている。興島の店舗は道に「裝飾した牌樓」を建てて英雄を迎える。⁽¹¹⁾

街中は賑わっている。（中略）店舗に飾り提灯を懸けて、労働英雄を迎える標語、大きな文字で書かれた「大安売り」の看板が人の目を引いている。普段最も賑やかな道

に松や檜で「牌楼」を建てた。その上に「労働英雄は最も光栄である」の提灯が飾られている。人々は廟会よりも賑やかだといっている。⁸⁶⁾

一九四四年の臨県での労働英雄の歓送会は以下のように行われた。

一二月二四日に臨県で盛大な労働英雄の歓送会が開かれた。二万人余りの人が来て英雄を歓送した。街中は賑わっており、冬訓練、寺家塔学校は秧歌隊を組織してその盛會を祝っていた。城関の民衆は状元橋を建てて、拍手と銅鑼の音の中で英雄を状元橋に迎え、高県長と張政委が英雄に賞を与えて、一緒に写真を撮った。⁸⁷⁾

(3) 騾馬大会との結合（一九四二年）

陝甘寧辺区において労働英雄運動が騾馬大会（家畜などの取引を行う大規模集市）を利用して行われるのは、一九四三年農曆九、一〇月の各分区区における労働英雄大会からであるが、晋西北ではこれに先んじて一九四二年から労働英雄が騾馬大会に参加する形での生産動員が行われている。

一九四二年三月一日から一七日まで、保徳県では騾馬大会が開かれ、労働英雄の楊奴作も賞品の牛を連れて参加し、生産動員を行った。⁸⁸⁾ なお、翌一八日は、春耕の開始を告げる龍

擡頭（農曆二月二日）であり、このような日程も意識されていたと考えられる。一九四三年三月、保徳県では騾馬大会と県労働英雄大会を開催し、王思良が賞品の牛を連れて出席し、演劇も上演された。⁸⁹⁾ その後も興県において、一九四四年二月二四日から二九日（龍擡頭）まで騾馬大会が開かれ、労働英雄温向栓が変工、生産、労働力と武力の結合を提唱し、八路军を擁護しようと訴えた。戦闘劇社、七月劇社の講演も行われ、舞台の前には毛沢東と労働英雄張初元の肖像が掲げられた。⁹⁰⁾

おわりに

労働英雄運動は陝甘寧辺区から始まり、生産を發展するために行われた運動であり、次第に他の辺区でも展開されるようになった。日本軍の軍事行動などで経済的に窮地に追い込まれた晋西北根拠地も労働英雄の選抜を始めるが、延安と全く同様の方法で行ったわけではない。

晋西北根拠地は陝甘寧辺区よりも早く、一九四一年から全辺区規模での労働英雄大会の開催を目指し、「辺区労働英雄大会」の名前を冠して翌年一月に大会を開催した。英雄の選抜においても、晋西北根拠地は陝甘寧辺区より早く、第一回の労働英雄大会の時から基層から選挙により英雄を選ぶようになっており、英雄を序列化して、全辺区の模範となる特等労働英雄の選定に着手している。第一、二回の労働英雄大会

において選ばれた英雄らはおおよそ貧農であり、陝甘寧辺区の富農経済政策とは異なる。張初元は第三、四回の労働英雄大会において「労働力と武力の結合」の代表として選ばれた特等労働英雄であった。前線である晋西北は生産の発展も重視するが、陝甘寧辺区と比べて「労武結合」に力点を置いた運動を展開していた。廟会の雰囲気の出、驟馬大会との結合などの民俗利用も陝甘寧辺区に先んじていた。

晋西北と陝甘寧の労働英雄運動の比較を通じて、晋西北の労働英雄運動は延安とは異なり自らの特徴があることが理解できる。中共の労働英雄運動は延安を起源とするのが、運動を構成するすべての内容が延安から始まるのではないと考えられる。晋西北根拠地の労働英雄運動は延安をモデルとしながらも、基層のレベルの選挙、英雄の序列化、特等労働英雄の選定、民俗利用などに関して、一九四三年以降の陝甘寧辺区の労働英雄運動に先行する形で様々な取組みが展開していた。晋西北根拠地は陝甘寧辺区と隣接しており、互いに影響を受けやすいと考えられる。晋西北の実践が反対に陝甘寧に影響に与えた可能性も否定できない。そして、李順達の履歴から見ると、「労武結合」という言葉自体は先に太行根拠地に使われており、晋西北は太行の経験を受け入れた可能性があると考えられる。その上で、一九四三年の延安の「組織起來」の呼びかけに呼応する形で、張初元の活動が「労武結合」の模範として顕彰されるようになったと推察できる。ここから従来の延安を中心とした中共根拠地の歴史叙述を見直すこ

との必要性が理解できる。

註(1) 晋綏辺区財政経済史編写組、山西省档案館編『晋綏辺区財政経済史資料選編』総論篇、山西人民出版社、一九八六年、三頁。

(2) 中共中央組織部、中共中央党史研究室、中央档案館編『中国共産党組織史資料第三卷(上、下)』抗日戦争時期(一九三七・七—一九四五・八)』中央党史出版社、二〇〇〇年、二二九頁。

(3) 「開展县滿有運動」『解放日報』一九四三年一月一日、第一版。

(4) 王彩霞『抗日戦争時期陝甘寧辺区劳模運動研究』中国社会科学出版社、二〇一四年。

(5) 王建华『革命的理想人格：延安時期労働英雄の生産邏輯』『南京大学学报・哲学、人文科学、社会科学』二〇一六年第五期。

(6) 韓晓莉『抗戦時期山西根拠地労働英雄運動研究』『抗日戦争研究』二〇一二年第三期。

(7) 王智『晋西北抗日根拠地労働英雄群体研究』山西大学修士論文、二〇一一年。

(8) 張基輝『中共重塑下的晋西北鄉村——張初元模式』与鄉村權威一九四〇—一九四五』山西大学修士論文、二〇〇七年。

(9) 賈莉『抗戦時期晋綏労働英雄研究』延安大学修士論文、二〇一七年。

(10) 佐藤宏『陝甘寧辺区の農村労働英雄と基層指導部——延安期の大衆路線』『中国研究月報』第四三三号、一九八四年。

(11) 内田知行『抗日戦争と民衆運動』第一章、創土社、

二〇〇二年。

(12) 高橋伸夫『党と農民 中国革命の再検討』、補論一、研文出版、二〇〇六年。

(13) 王彩霞前掲書、二八一—三〇頁。

(14) 陝甘寧辺区建設庁農牧「一九三九年農業生産総結報告」陝甘寧辺区財政経済史編写組編『抗日戦争時期陝甘寧辺区財政経済史料選編』第二篇農業、陝西人民出版社、一九八一年、六三頁。

(15) 朱楚珠編『中国人口』陝西分冊、中国財政経済出版社、一九八八年、七一頁。

(16) 「辺区各県区画人口統計表」(一九四一年二月二〇日) 陝西省地方志編纂委員会主編、曹占泉編『陝西省志』人口志、三秦出版社、一九八六年、一一一頁。

(17) 王彩霞前掲書、三〇頁。

(18) 「辺区農民向呉満有看齐」『解放日報』一九四二年四月三〇日、第一版。

(19) 「人人都在談說着趙占魁」『解放日報』一九四二年九月七日、第二版。

(20) 「向模範工人趙占魁學習」『解放日報』一九四二年九月一日、第一版。
 「向模範工人趙占魁學習」『解放日報』一九四二年九月一日、第一版。

(21) 「向模範工人趙占魁學習」『解放日報』一九四二年九月一日、第一版。

(22) 「总工会号召開展趙占魁運動」『解放日報』一九四二年一月二日、第二版。

(23) 「響應趙占魁運動！振華紙厂發起競賽」『解放日報』一九四二年一月三日、第二版。

(24) 「新華厂成立三周年 生産提高八十四倍 趙占魁運動獲初步成績」『解放日報』一九四二年一月三日、第二版。

(25) 「開展呉満有運動」『解放日報』一九四三年一月一日、第一版。

(26) 陝甘寧辺区財政経済史編写組編『抗日戦争時期陝甘寧辺区財政経済史料摘編』一総論、一九八〇年、二二—二二三頁。

(27) 「兩三年內完全学会經济工作」(一九四五年一月一〇日) 王冰編『生産文獻』山東新華書店、一九四六年、一七頁。

(28) 郭維明『晋綏革命根拠地政權建設』山西古籍出版社、一九九八年、三五—三六頁。

(29) 中共山西省委党史研究室、中共內蒙古自治區委党史資料徵研委办公室、晋綏革命根拠地史料徵編指導組办公室『晋綏革命根拠地大事記』山西人民出版社、一九八九年、一五七頁。

(30) 「行署抗聯指示各級為創造二百勞動英雄而奮闘」『創造四十名女勞動英雄婦聯指示各級弁法』『抗戰日報』一九四一年五月四日、第三版。

(31) 「晋西北生産展覽會開幕 勞動英雄檢閱同時舉行」『抗戰日報』一九四二年一月一七日、第三版。

(32) 「各地歡送勞動英雄 興泉慶祝勞英大会」『抗戰日報』一九四二年二月一七日、第二版。

(33) 「勞動英雄大会開幕」『抗戰日報』一九四二年二月一日、第一版。

(34) 「行署、抗聯共同規定模範勞動英雄產生獎勵方法」『抗戰日報』一九四一年七月三十一日、第三版。

(35) 「生産展覽會定期召開」『抗戰日報』一九四一年二月五日、第二版。

(35) 「農業生産調查一九四〇年—一九四二年」(一九四三年) 晋綏辺区財政経済史編写組、山西省檔案館編『晋綏辺区財政経

濟史資料選編』農業篇、山西人民出版社、一九八六年、六九八頁。

(36) 「行署頒布勞働英雄條件 号召開展生產競賽」『抗戰日報』一九四三年三月二〇日、第一版。

(37) 「晉綏辺区第三次勞働英雄大會隆重開幕 群衆歡騰鼓舞各界熱烈祝賀」『抗戰日報』一九四四年一月二日、第一版。

(38) 第三回までの勞働英雄大會の呼称を「群英大會」に変更した。韓曉利は、一九四四年以降「群英大會」が使われるようになったのは「群英大會」のほうが民衆の感覚を反映できるからだと指摘している（韓曉利前掲論文、六頁）。

(39) 「群英大會中心意志・使勞武結合更進一步」『抗戰日報』一九四四年二月八日、第二版。「晉綏辺区勞働人民榮典 群英大會隆重揭幕」『抗戰日報』一九四四年二月一〇日、第一版。

(40) 小林弘二『二〇世紀の農民革命と共產主義運動』中国における農業集団化政策の生成と瓦解』勁草書房、一九九七年、三七―八九頁。

(41) 王彩霞前掲書、六一頁。

(42) 莫艾「模範英雄吳滿有是怎样發現的」『解放日報』一九四二年四月三〇日、第二版。

(43) 「勞働英雄与模範生產工作者及其代表選舉弁法」『解放日報』一九四三年一〇月一四日、第一版。

(44) 王建華前掲論文。引用元：「關於勞働英雄的幾個問題」陝西省檔案館、檔案号：六一―一二四二。

(45) 王彩霞前掲書、六一頁。

(46) 王建華前掲論文。引用元：「勞模的產生（運動發展簡況）」陝西省檔案館、檔案号：六一―一二四〇。

(47) 「行署、抗聯共同規定模範勞働英雄產生獎勵弁法 生產展

覽大會改十一月底舉行」『抗戰日報』一九四一年七月三日、第三版。

(48) 李玉文編著『山西近現代人口統計与研究』中国經濟出版社、一九九二年、四五九―四七二頁。

(49) 李玉文前掲書、四一五頁。

(50) 「行署頒布勞働英雄條件 号召開展生產競賽」『抗戰日報』一九四三年三月二〇日、第一版。

(51) 李富春「關於勞働英雄模範工作者問題」『解放日報』一九四五年一月九日、第一、四版。

(52) 一九二九年に中華民國が發表した度量衡法によると、一石は一〇〇リットルであるが、現地の度量衡をそのまま使用し続けている例も多く、当時の陝甘寧辺区がこれに従っていたかは不明である。

(53) 趙元明編『陝甘寧辺区的勞働英雄』大衆書店、一九四六年、二二―一二二頁。

(54) 「二十五位特等勞働英雄 每人榮獲獎金三萬元」『解放日報』一九四三年二月一九日、第一版。

(55) 毛沢東『中国革命与中国共產党』新民主出版社、一九四九年、三〇頁；毛沢東『新民主主義論』中原新華書店、一九四九年、一五頁；中央檔案館編『中共中央文件選集』（一九四一―一九四二）一三、中共中央党校、一九九一年、二八〇―二八九頁。

(56) 「怎樣分析階級」『關於土地鬥爭中一些問題的決定』『政策選輯』新華書店、一九四九年、九七―一一頁。

(57) 小竹一彰『中国共產党の農民階級区分論―その生成期に関する一考察』、小林弘二編『中国農村変革再考―伝統農村と変革』アジア研究経済所、一九八七年、九九―一〇〇頁。

(58) 田原史起『中国一九五〇年期土地改革における「階級」と

- (59) 農村社会—階級区分工作の実施過程についての考察』『アジア研究』第四三卷第一号、一九九六年、三一—七三頁。
- (60) 方慧容『無事件境』与生活世界中的『真实』—西村農民土地改革時期社会生活的記憶』楊念群主編『空間・記憶・社会転型—新社会史』研究論文精選集』上海人民出版社、五三一—五四三頁。
- (61) 中井明『現代中国農村における政策浸透—一九四〇年代後半から一九五〇年代初期の階級区分基準の操作実態の分析』『アジア研究』第五一卷第四号、二〇〇五年、一七一—三二頁。
- (62) 左宣『我看見了楊叔作』『抗戰日報』一九四二年二月二日、第三版。
- (63) 韋文『晋西北的土地問題』(一九四二年四月二〇日) 晋綏辺区財政經濟史編寫組、山西省檔案館編『晋綏辺区財政經濟史資料選編』農業編、山西人民出版社、一九八六年、六三頁。
- (64) 狄民『大犍牛的獲得者—王思良』『抗戰日報』一九四二年二月二日、第三版。
- (65) 張基輝『中共重塑下的晋西北鄉村—「張初元模式」与鄉村權威一九四〇—一九四五』山西大學修士論文、二〇〇七年。
- (66) 「張初元の生産戰闘成績』『抗戰日報』一九四四年一月四日、第二版。
- (67) 張基輝前掲論文、一七頁 引用元：『寧武縣新堡村支部工作情況—張初元同志的談話材料』A二三八—二九一三、山西省檔案館
- (68) 「興県二区模範農救會會員温象栓當衆受獎』『抗戰日報』一九四三年五月二五日、第二版
- (69) 「温象栓是怎样耕種的』『抗戰日報』一九四三年七月三日、第二版
- (69) 王涓、張鈺著『金星英雄李順達伝』山西出版集團北岳文芸出版社、二〇〇八年、九八一—一三頁
- (70) 「太行一等労働英雄李順達訂出五年發家計画』『人民日報』一九四六年六月一九日、第二版
- (71) 太岳行署編『發展新式富農經濟 向石振明看齐』一九四六年。
- (72) 「阜平労働英雄胡順義』『晋察冀日報』一九四五年一月三十一日、第四版。「大石』については、旧制の容量單位と考えられるが、具体的な數値は不明。
- (73) 内田前掲書、四九頁。
- (74) 岳謙厚、張璋『黃土・革命与日本入侵—二〇世紀三四十年代の晋西北農村社会』書海出版社、二〇〇五年、二八頁。
- (75) 「高崗同志在辺区労働英雄代表大會与生産展覽會開幕典禮上的講話』『解放日報』一九四三年一月二七日、第一版。
- (76) 「林主席在辺区労働英雄代表大會上的閉幕詞』『解放日報』一九四三年二月二九日、第一版。
- (77) 「春耕簡訊』『抗戰日報』一九四一年六月二日、第三版。
- (78) 「寧武開労働英雄大會 張初元得大犍牛一頭』『抗戰日報』一九四四年一月四日、第二版。
- (79) 「響応毛主席「組織起来」的号召、学習敵後吳滿有運動的模範労働英雄張初元同志』『抗戰日報』一九四四年一月二日、第一版。
- (80) 丸田孝志『革命の儀礼—中国共产党根拠地の政治動員と民俗』汲古書院、二〇一三年。
- (81) 丸田前掲書、六〇頁。
- (82) 「狀元—陳德發回来以後』『解放日報』一九四四年二月一七日、第四版。
- (83) 「労働英雄大會開幕 生産展覽會同時举行』『抗戰日報』

- 一九四二年二月一九日、第一版。
- (84) 丸田前掲書、五六―六〇頁。
- (85) 「晋西北生産展覽会開幕 勞働英雄檢閲同時挙行」『抗戦日報』一九四二年一月一七日、第三版。「牌樓」は中国の伝統的建築様式の門の一つである。
- (86) 「勞働英雄們走過的時候」『抗戦日報』一九四二年二月一九日、第二版。
- (87) 韓曉莉『革命与節日―華北根拠地節日文化生活一九三七―一九四九』社会科学文献出版社、二〇一九年、一六三頁。
引用元：勞働的人是光榮的、各県歡送群英赴会『晋西大衆報』一九四四年二月一〇日。
- (88) 丸田前掲書、五九―六〇頁。
- (89) 「保德挙行騾馬大会 繁栄市面幫助春耕」『抗戦日報』一九四二年三月二日、第三版。
- (90) 「歡迎王思良準備春耕 保德籌備開騾馬大会」『抗戦日報』一九四三年二月二七日、第一版。
- (91) 「積極準備生産 興県挙行騾馬大会」『抗戦日報』一九四四年三月二日、第二版。
- (広島大学大学院人間社会科学科博士課程後期)